土器群の編年的位置と地域性について

宮城県内における縄文時代後期前葉の土器群については南境式（伊藤信雄：1957）が一般的に用いられている土器型式である。

南境式の型式設定時にはごく少量の土器が示されたに過ぎず、これに対して当該期の土器群を数型式に細分し、南境式は型式設定時の資料に限定してその他のものは新たな型式名を与えようとする考え方がある。林謙作氏の袖窪式や後藤勝彦氏の宮戸Ⅰ（ａ・ｂ）式がそれである（林：1967、後藤：1957、1962、1967、1974、1981）。これらの考え方は基準となる資料が十分に提示されていないため型式の内容が必ずしも明確になっておらず、また後藤氏の場合には論文や報告によって各型式の内容が変更されて把握しにくいものになっている。さらに林・後藤両氏の場合には宮城県北部の遺跡から出土した土器を基準としているため、本遺跡のような県南地域の遺跡についてその型式を適用するには疑問が残る。

その後、伊東信雄氏は「宮城県史 34」(伊東他：1981)の中で、県内各地出土の多数の土器によって南境式の内容を明らかにしている。

したがってここでは全県的な資料をもとに設定された南境式を後期前葉の土器型式とする立場に立ち、その内容に本遺跡出土の後期第Ⅰ・第Ⅱ群土器の一部も用いられており、また第Ⅲ群土器は「宮城県史 1」の資料と類似する。したがって第Ⅰ～Ⅲ群土器いずれもが南境式に比定されるべき土器群と思われる。

次に、各群の土器をそれぞれの類例と比較検討することによって南境式内部の編年的位置と地域性を明らかにしていきたい。

第Ⅰ群土器

第Ⅰ群土器の類例を県内に求めると、白石市菅生田遺跡（丹羽茂他：1982）、柴田町向畑遺跡（芳賀寿幸：1983）、仙台市六反田遺跡（田中則和他：1981）、同梨野Ａ遺跡（田中則和他：1983）、宮城町農学寮跡遺跡（真山悟：1982）、鳴瀬町里浜貝塚袖窪地区（林謙作：1965）、色麻町大谷地遺跡（茂木好光：1984）、一迫町青木畑遺跡（加藤道男：1982）などがある。

このうち、菅生田遺跡の報文では向畑・里浜・六反田・青木畑遺跡出土土器群ともに南境式でもその初期に位置づけ、さらに宮城県内の北部と南部とでは器形組成に地域差が認められること、仙台市の六反田遺跡は基本的に南部地域に位置しながらも北部地域に近い特徴をも有していること、そして県北部はさらに岩手県南部まで、県南部は福島県にかけての、おのおのの地域的特性を有することが指摘されている。

第478図　向田遺跡出土土器

第479図　向田遺跡出土土器

ここでは菅生田遺跡の報文の見解をふまえ、さらに各地域における土器群のあり方を検討してみたい。

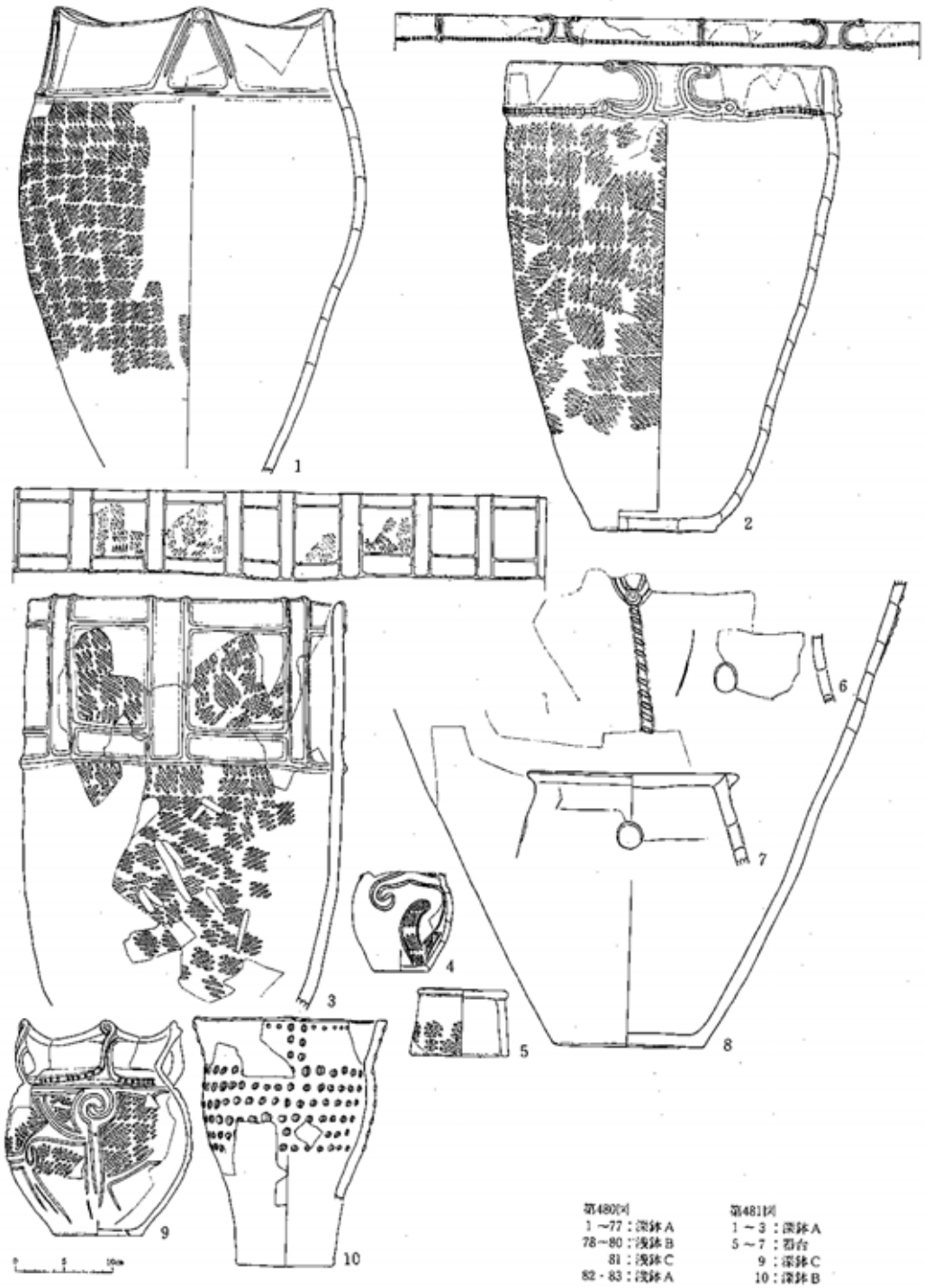
向畑遺跡

遺物包含層（第 2・3 層）から出土している。ほぼ第Ⅰ群土器同様の類を含んだ土器組成と思われるが、深鉢A類やD類はみられない。また第 2 層と第 3 層では、口縁部が直立する器形の口頸部文様などは共通するが、第 3 層には一部に刻目のついた隆線による方形区画文や、文様上下の隆線間を斜行隆線・沈線で区画する文様があり、胴部文様に隆線の用いられるものが主体的であるが、第 2 層ではそれが沈線主体となり、「J」字状文など第Ⅱ群土器第 1 グループに類似するものがみられる。

菅生田遺跡

主に遺物包含層から出土している。深鉢（A・B・C）、浅鉢（A・B）から成り、口縁部がほぼ直立する深鉢Aと外傾する深鉢Bが主体である。二屋敷遺跡の深鉢C・F・0 類と同様の器形と思われる。文様は器形の違いを越えた共通性が認められ、弧状・渦巻文のAグループ、それに強い関連性のあるBグループ、下垂線文・方形区画文のCグループに分かれている。向畑遺跡出土土器との共通点が多いが、方形区画文を描く隆線には刻目が認められず、また深鉢 0 IIIb1 類のような連結文様はみられるものの、第Ⅱ群土器第 1 グループと類似するものは遺物

第480図　菅生田遺跡出土土器



第481図　菅生田遺跡出土土器

包含層以外から出土した深鉢Cだけがあげられる。深鉢Cは把手から突起にかけての形態が異るものの、器形・胴部の連絡渦巻状文はともに深鉢HⅡａ類に例がみられる。

青木畑遺跡

遺物包含層から出土している。量的には少いが、深鉢は胴上部が脹んで口縁部が内反気味、内傾する器形（ＩＡ～ＩD類）と変化なく口縁部まで立ち上がるもの（ＩＥ・Ⅱ類）とがある。前者が主体的であり、隆線によって文様が描かれ、縄文や刺突文が充塡される。後者は一部刻目隆線や沈線で方形区画文などが施文されるものと、地文だけのものとがある。また胴部資料には連続刺突文が施される土器も含んでおり、二屋敷遺跡Ａ・Ｂ・Ｃ・0（Ｉ・Ⅱ）類等に共通する特徴を多くもっている。

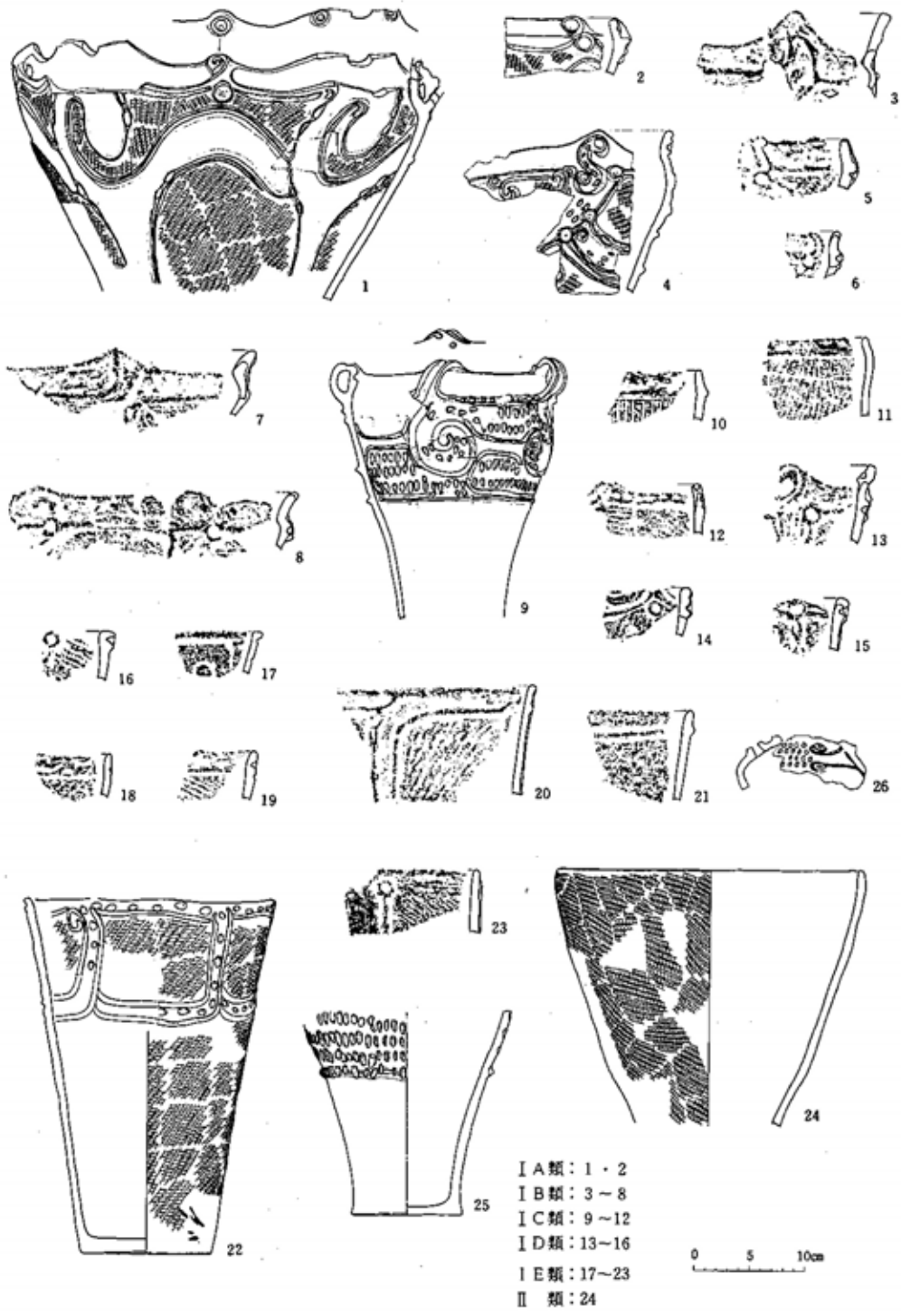
大谷地遺跡

遺物包含層から主に出土している。深鉢・浅鉢・注口土器があり、浅鉢と注口土器はごくわずかである。深鉢は5類（Ｉ～Ⅴ）に分けられ、口縁部が直立して変化の少い単純な器形（Ⅲ類）と頚部がゆるやかにくびれるもの（Ⅳ類）が主体を占める。このほかに胴上部が脹んで口縁部が外反するもの（Ｉ類）や胴中位に稜がついてそれ以上が外反気味に立ち上がるもの（Ⅱ類）や胴部が外傾して口縁部が内傾するもの（Ⅴ類）を少量含み、器形の組み合わせは青木畑遺跡と共通するものが多い。しかし、Ｉ類がごく少く、その器形は青木畑遺跡ＩＡ類よりは屈曲が少く、ＩＢ類に近い。文様が一部連鎖状隆線で描かれる点は同じである。全体的には沈線文様が多く、ⅣA類の渦巻状沈線文などは菅生田遺跡深鉢C類や二屋敷遺跡深鉢HⅡａ類（第Ⅱ群土器第1グループ）の連絡渦文に類似性が求められる。地文の細い撚糸文が目立つ。

以上の各遺跡のうち、県南地域に属する菅生田遺跡と向畑遺跡についてみると、向畑遺跡における第2層と第3層の出土土器の違いがあげられる。共通した類をもちながらも施文技法や方形区画文のあり方が異り、第3層出土土器の中に中期大木10式第Ⅳ段階（最終段階、丹羽茂：1981）の土器との識別が困難なものを含んでいる。さらに第2層出土土器には二屋敷遺跡第Ⅱ群土器第1グループと共通する類をもっており、第3層は第2層よりも古い土器群としての特徴が認められる。菅生田遺跡出土の土器は方形区画文や連絡渦巻文などからすればより向畑遺跡第2層出土土器に近い段階と思われる。

一方、県北地域についてみると、青木畑遺跡と大谷地遺跡の土器群の間に同様のことが認められる。青木畑遺跡ＩＡ類（　二屋敷遺跡A類）、一部刻目隆線による方形区画文が大谷地遺跡にみられないことや沈線文様が主体を占め、また渦巻文（　菅生田遺跡深鉢C、二屋敷遺跡深鉢HⅡａ類）の存在は、大谷地遺跡の土器群が青木畑遺跡のそれよりも新しい特徴をもつものと考えられる。

また県南地域と県北地域との比較をすれば、共通点は方形区画文が施される胴部中位に稜が



第482図　青木畑遺跡出土土器

ついてそれ以上が外反気味に立ち上がる類、頚部がゆるやかにくびれる器形、単純な器形と口縁部の「V」字状隆線文、連続刺突文が胴部に施文されるものなどがある。そして相違点は胴上部が脹んで口縁部が内傾、外反気味で一部連鎖状隆線による文様をもつ類の有無、単純な器形や頚部がゆるやかにくびれる器形に施される胴部文様の違い、地文では県北地域に細い撚糸文の目立つこと、などがあげられる。2 点目の胴部文様については、方形区画文は両地域にみられるが、それを除くと県南では渦状、弧状を基本とした文様であるのに対し、県北地域では胴上部で「八」字状を成す文様が主体を占めている。

これら両地域間の、共通点は同時期性を、相違点は地域差を現わしていると理解される。

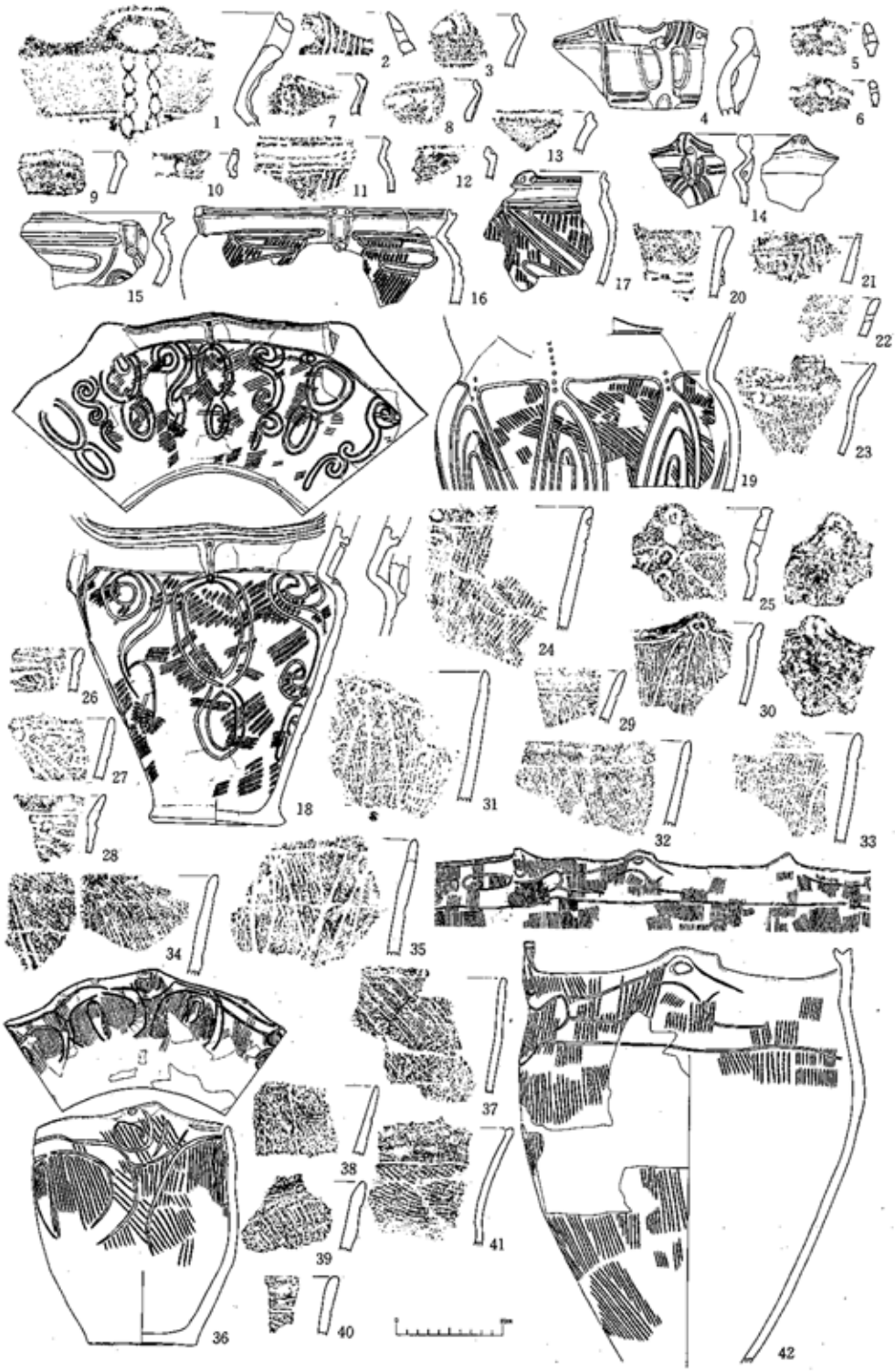
第Ⅱ群土器

第Ⅱ群土器に関しては、県南地域には前述の向畑遺跡などに類例はみられるが、まとまりがなく、比較すべき資料が乏しい。したがって第Ⅰ群土器の項で指摘した向畑遺跡第 2 層や菅生田遺跡出土土器にみられる第Ⅱ群土器第 1 グループとの類似性を中心にして年代的位置づけを検討する。

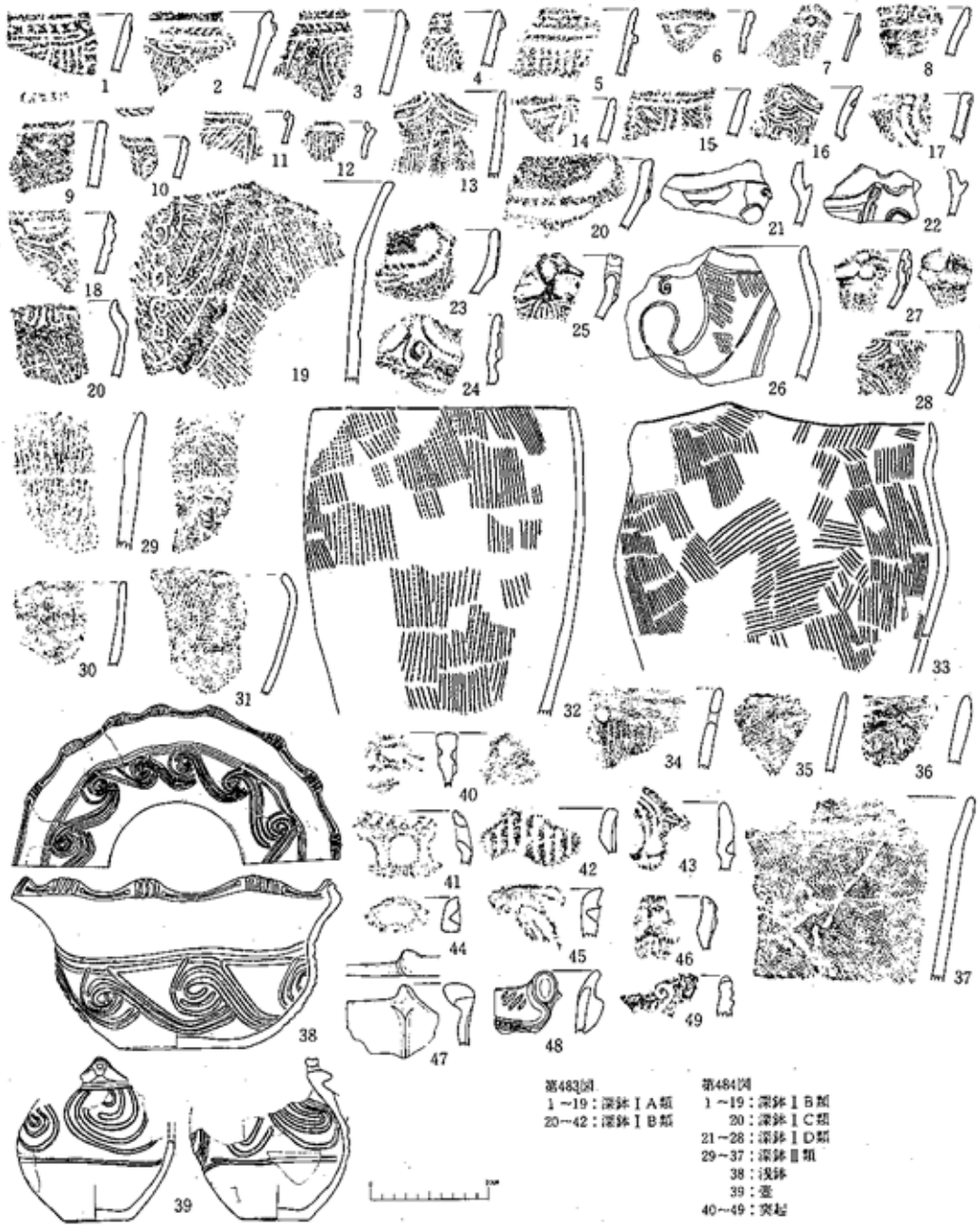
その類似性が最も表われているのは第 1 グループの深鉢 0Ⅲb2 類文様（ⅰ）と深鉢HⅡａ類文様(ⅰ)で、向畑遺跡からの引用第 479 図 21・22・24 が前者に、菅生田遺跡の同第 481 図 9 が後者の一部（第 471 図 4）に相当する。

深鉢 0Ⅲb2(ⅰ)類は縦位平行線の上部が円・半円・楕円・「U」字状になる文様で、単位が一連の沈線で描かれており、連結文様とした上部と下部が別々の小単位をボタン状隆線などで結んだ文様である深鉢 0Ⅲb1 類とは識別されるのであるが、単位形は似ており、また頚部に隆線の巡るものが多いことなどの共通点もみられる。深鉢HⅡａ(ⅰ)類の連絡渦文は渦から平行線が下る単位を斜行線で連絡しており、横位連結文的な要素と蕨手文に近い単位とで文様が構成されている。

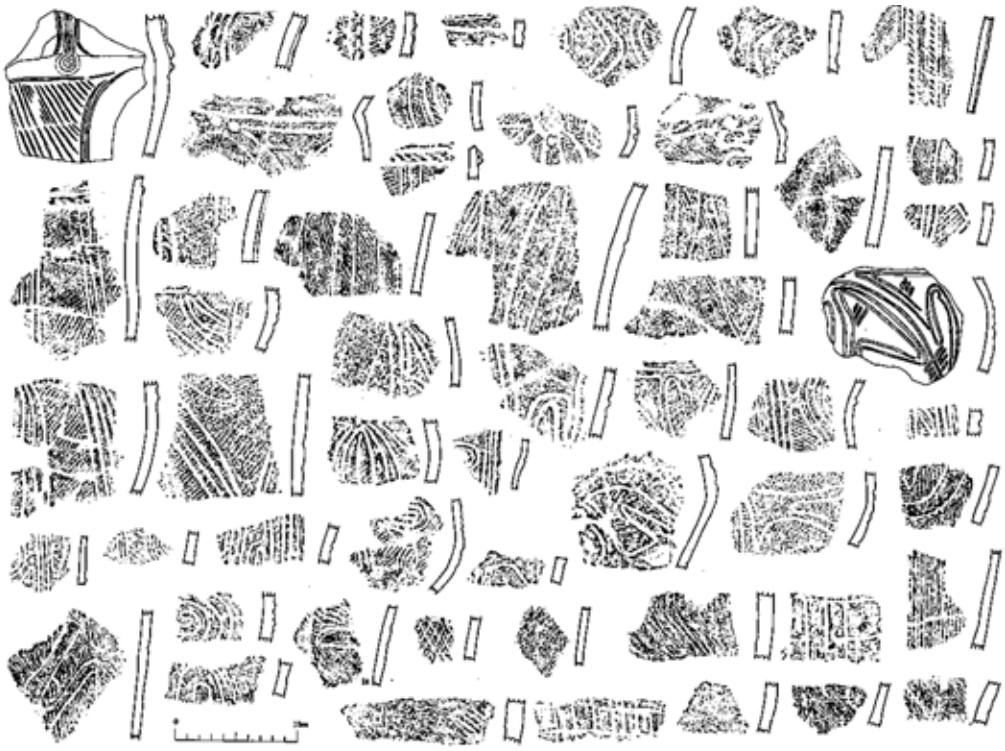
これらを含めて第Ⅱ群土器第 1 グループと判明した土器は、口縁部資料が 85 点で、第Ⅱ群土器に占める割合は 1.3%、また深鉢 0Ⅲb2(ⅰ)類が 0Ⅲb2 類の中では 19.5%となり、全体からみればごくわずかな量である。この種のグループが存在することは、第Ⅰ群土器から第Ⅱ群土器にかけての文様の変遷を理解しやすいものにしている一面があり、また第Ⅱ群土器の土器組成としてはその主体となる第 2 グループとともに古い要素をもつ第 1 グループが組み合うことは、遺物包含層中での一定期間内における土器組成としてはあり得る事と思われる。しかし、本遺跡の遺物包含層は 2 枚に大別され、各層の組み合わせに違いが認められない結果となっており、両層出土土器を含めた形での組成であるところから、層上面や、住居跡など生活面で一括出土した遺物に較べればかなり時間的幅の広い組み合わせであると考えなければならない。したが



第483図　金取遺跡出土土器



第484図　金取遺跡出土土器



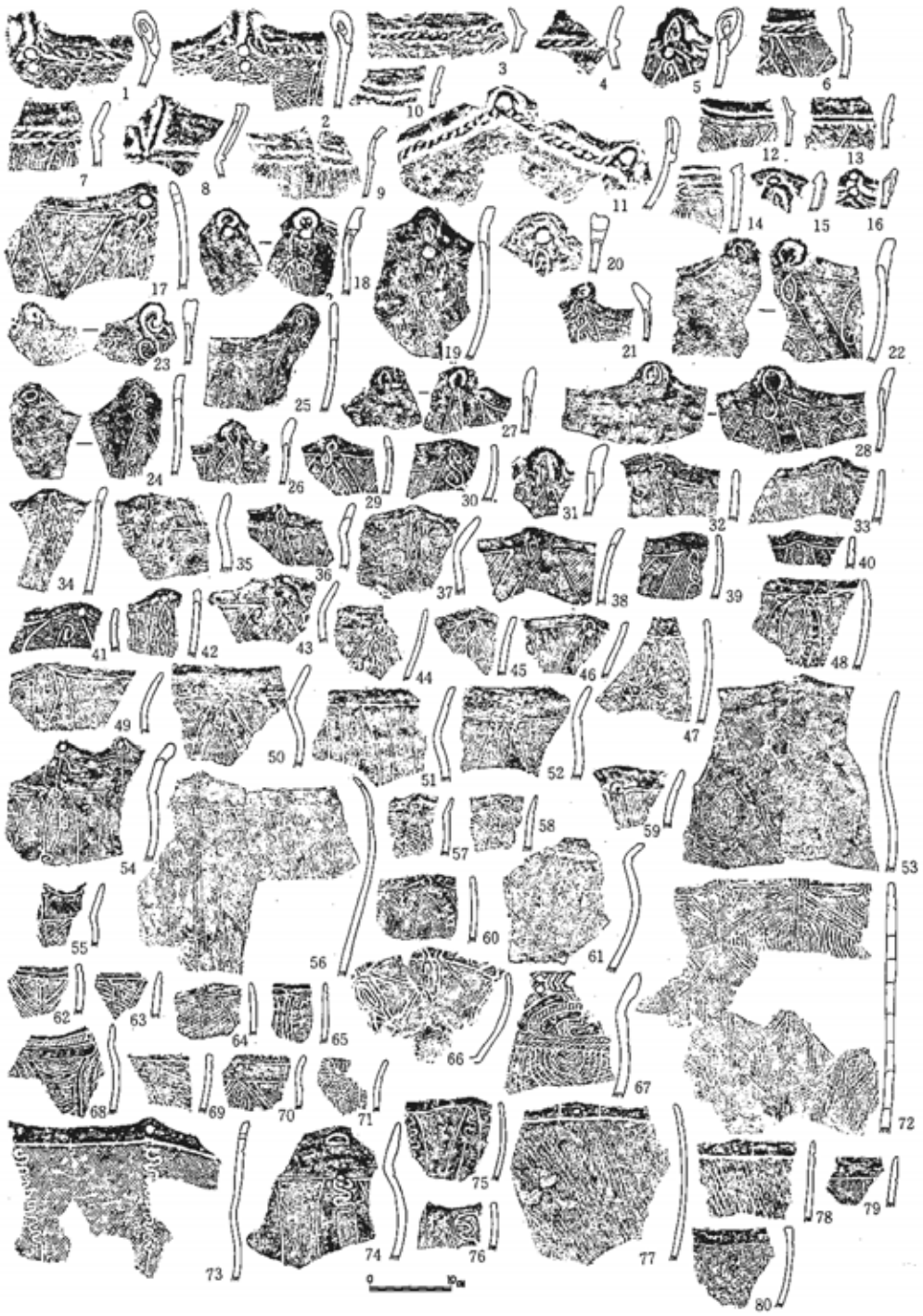
第485図　金取遺跡出土土器

って遺物包含層出土遺物としての第Ⅱ群土器は、その特徴を第２グループが現わしており、また包含層が形成された時間的幅に含まれるという意味で第Ⅱ群土器全体の組成が位置付けられる可能性がある。

一方県北地域で第Ⅱ群土器の類例を求めると、石巻市南境貝塚（後藤勝彦：1974）、大和町金取遺跡（小野寺祥一郎：1980）などをあげることができる。

金取遺跡

遺物包含層から出土している。深鉢の器形は頚部が「く」字状になる第１グループ、口縁部がほぼ直立する単純な器形の第2グループ、直線的に外傾する第3グループに分けられており、量的には第２グループが多い。この器形の組み合わせは二屋敷遺跡第Ⅱ群土器の主体を成す深鉢０・Ｈ・Ｍ類に共通する。また第１・第２グループの突起の形状、第３グループの口縁端部の形態はいずれも第Ⅱ群土器の中に含まれている。文様の明らかなものは少いが、第１グループの胴部には横位に展開する文様や楕円文・渦文などが、第２グループには円・楕円を基点とした文様や「Ｓ」字連鎖文を中心にした重層する懸垂文が沈線で描かれ、蕨手文もみられる。また第３グループには多条沈線による文様が多い。第１・第３グループの文様や第２グループの蕨手文は二屋敷遺跡第Ⅱ群土器とほぼ共通するが、第２グループの他の文様はむしろ前述した



A群土器　第1類：1～11　第5類：29～38　B群土器　第7類：54～56　第11類：77～80
第2類：12～16　第6類：39～53　第8類：57～61
第3類：17～20　第9類：62～72
第4類：21～28　第10類：73～76

第486図　南境貝塚出土土器

第487図　南境貝塚出土土器

大谷地遺跡との類似性が認められる。浅鉢はＣⅠ類、壺は注口土器Ａ類の器形に似ており、文様は多条沈線が用いられている。地文は撚糸文が目立つ。

南境貝塚

第一次調査、第四次調査の資料が示されている。Ａ・Ｂ・Ｃ群に分けられており、Ｂ群土器との共通性が強い。器形の組成は金取遺跡の３つのグループに二屋敷跡深鉢ＤⅡ類的な器形が加わっていると思われる。主な文様は小円を中心にした対称弧状文、平行沈線、下垂沈線の上部が連続「Ｓ」字状になるもの、蕨手文、ジグザグ文など縦長の単位、横位に展開する文様、多条沈線文様などで、地文は金取遺跡同様撚糸文が目立つ。

この両遺跡の土器群は共通点が多いが、南境貝塚ではＢ群土器より古い段階の土器群としてＡ群土器が位置づけられており、Ｓ字連鎖文・口縁部の８字状連鎖文・Ｓ字文・連続楕円文はＢ群土器にみられなくなるが、金取遺跡ではそのうちＳ字連鎖や胴部文様の基点に対称弧状的楕円文が認められる。そして、二屋敷遺跡とは器形組成と文様が大略一致するが、文様の一部や地文などに違いがみられる。文様の点では縦長の単位文様のうち小円や縦位平行線の上部が連続Ｓ字状になる文様は二屋敷遺跡に認められず、対称弧状文もごく少い。また口縁部装飾は沈線や盲孔によるものと、それに隆線や刻目・刺突も加わったより発達したものとの違いがあり、地文の撚糸文は二屋敷遺跡ではごく少い。これらの相異点は第Ⅰ群土器段階で存在した県北地域と県南地域との地域差がこの段階まで続いていることを示していると思われる。

また金取遺跡、南境貝塚の縦長単位の文様は、第Ⅱ群土器の１・２条沈線による縦長単位文様に対比される存在であると思われ、共通する蕨手文も認められるがその数は少く、第Ⅱ群土器では圧倒的多数を占めている点にも地域的特性が現われている。

第III群土器

第III群土器に類似した資料は、前述の南境貝塚（C群土器、伊東：1957）や西ノ浜貝塚（後藤勝彦：1965）、向畑遺跡からも出土しているが、まだまとまりをもった形での資料の提示が行われていない。したがって他遺跡との比較検討は今後の課題とする。

以上、二屋敷遺跡出土の後期前葉とした土器について、3 つの群ごとに検討を行った。その結果、各群はいずれも南境式に比定される特徴をもちながら、遺物包含層中での同時期性が認められる第Ⅱ群土器とそれより古い第Ⅰ群土器、新しい第III群土器それぞれに県内における類例を求めることができた。そしてその類例は県北・県南両地域にみられ、3 段階に分けることができる。

県南地域でみると、まず第Ⅰ群土器の類例である向畑・菅生田遺跡の土器群、次に二屋敷遺跡第Ⅱ群土器、さらに二屋敷遺跡第III群土器など、である。向畑遺跡や菅生田遺跡の例が南境式の中でもその初期の段階にあたることは、すでに菅生田遺跡の報文において指摘されているところであるが、向畑遺跡第 3 層・第 2 層の土器群にみられるように、この段階はさらに二分される可能性がある。またこの 3 段階は、二屋敷遺跡第Ⅱ群土器第 1 グループの一部と同じ特徴をもった土器が含まれていて土器組成に一部重複する類があること、二屋敷遺跡第III群土器などの土器群の内容がいまだ明確に提示しえないことから、南境式を細分した土器型式設定のための基準資料とするには無理な点が残る。したがって、県内地域における土器群の変遷ととらえ、仮りに向畑（菅生田）遺跡段階―二屋敷遺跡第Ⅱ群土器段階―二屋敷遺跡第III群土器段階としておく。

同様に県北地域においては、青木畑・大谷地遺跡段階―金取遺跡（南境貝塚B群土器）段階―南境貝塚C群土器段階とすることができる。南境貝塚A・B・C群土器について後藤勝彦氏はB群土器を宮戸Ⅰb式に、A群土器はそれ以前に、C群土器はそれ以降とし、C群土器が型式設定時の南境式と類似するところからその土器群を南境式と呼ぼうとする見解を示している（後藤：1974）。しかし後藤氏も述べられているように、A群土器はその分布範囲を「広義の門前式等も含めて、北は岩手県の中頃から南は現在宮城県中頃まで」とし、県南地域の土器は「A群土器やB群土器の一部とは相当の開きが観取される」ことからすれば南境式とは分布範囲が異っており、またB群土器の内容にA群土器からと関東地方からとの 2 つの異った伝統を受けたものが含まれているとしていることは、A群土器類似の土器群とB群土器＝宮戸Ⅰb式との関係が不明瞭であると言わざるを得ない。したがって宮戸Ⅰb式については南境式の時間的・空間的に細分化された型式である可能性は強いと思われるものの、現時点では上記のような位置づけを考えておきたい。また第 1 の段階は前述のようにさらに細かな変遷となることもありうる。

なお、袖窪式については、公表された土器の特徴をみる限り、青木畑・大谷地遺跡段階に属することが明らかである。

次に隣接県の状況について若干ふれておきたい。二屋敷遺跡後期前葉の土器の類例は福島県にも認められ、いわき市綱取貝塚（金子・和田：1968、馬目順一：1968）、大畑貝塚（馬目順一他：1975）、愛谷遺跡（馬目：1982）などが知られる。特にいわき市綱取貝塚ではC地点および第四地点出土土器によってそれぞれ綱取Ⅰ式、Ⅱ式が設定されている(馬目順一：1970、1977)。この中で第Ⅱ群土器と類似するものは綱取貝塚第四地点出土土器であり、第Ⅱ群土器第1グループの存在は明らかでないが、第2グループの土器組成にほぼ含まれる内容をもっている。ただ組成をなす各類の出土量では違いがみられ、綱取貝塚では第Ⅱ群土器深鉢HⅡ類などに相当する、口縁部の大きく外反するａタイプの器形が多数を占めており、また地文だけが施される土器がごく少いことなどがあげられる。しかしこのような頻度の相違が即地域差といえるかどうかわからず、それよりも「V」字状文など福島県から関東地方に多く分布する文様の描かれた土器をかなり含んだ綱取Ⅰ式土器の次に位置づけられる土器群であるという伝統の違いがあり、後期初頭にみられた宮城県南部から福島県という共通した土器の分布圏の中の細かな地域差が、第Ⅱ群土器の段階ではごく少くなっていると把えることができる。

また岩手県では、その南半部に、後期初頭の時期に宮城県南部と同様な地域的特性をもった土器が分布していることはすでに指摘されている（後藤勝彦：1974、草間俊一他；1971など）。類例としては陸前高田市門前貝塚（吉田義昭：1957、及川旬他：1974）、花泉町貝鳥貝塚（草間他：1971）、北上市八天遺跡（本堂寿一：1979）をとが知られており、青木畑遺跡、大谷地遺跡などとほぼ同様な土器組成をもっている。

第Ⅱ群土器段階には前掲遺跡からも出土しているが、まとまりをもった報告例は多くない。宮城県北部とを含めてそれ以南と比較してみると、前述した宮城県内における地域差が及んでいる一方で、深鉢HⅡ、M・0類などの基本的な器形組成だけではなく縦位の文様単位では蕨手文をはじめジグザグ文や連続S字文、また横位展開文様や多条沈線文様など共通性が多くみられる。これらの器形と文様が、少くとも宮城県南部では中期末葉から後期初頭にかけての系統から成立するものであることが明らかとなっており、両地域の土器群は一部に地域的特性を残しながらも、後期初頭の向畑（菅生田）遺跡段階、青木畑・大谷地遺跡段階よりかなり地域差は少くなっており、当地方の伝統の中から生まれたものと考えられる。